

仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News

第二十七号



日立システムホール仙台(仙台市青年文化センター)コンサートホール

文学のある風景

コンサートホール

初めて足を運ぶホールだった。地下二階、地上三階建てのかなり大きな建物で、コンサートホールのほかにもシアターホールや多目的に使われるホール、会議室などが備わった複合施設である。ホール自体は、現在は一路線しかない地下鉄に乗り、仙台駅から北へ数駅行ったところにあった。地下鉄駅に隣接しているので地下鉄を使ってもよかったのだが、タクシにしたのは、街の風景を眺めたかったからだ。

仙台では合計五回演奏していたが、そのうち三度は、街の中心部のホールを、残りの二度は、地下鉄線の終着駅のそばのホールを使っていた。二度とも移動はタクシで、私の隣には妻が乗っていた。タクシを使ったのは、そのときと同じように、仙台の街並みを眺めながら移動したかったからだ。

仙台に限らず、地方都市に出かけた際、絵梨子は、タクシの窓から外を眺めながら、「あつ、前に来たとき、あのビル、なかったよね」とか、「へえ、ここにファミレスができたんだ」とか、「チャンスがあったら寄ってみよう」と思っていたのに、お店が駐車場に変わっちゃって「あっ、なかった」と、しよつちゅう口にして、その記憶力には驚かされるばかりだった。

絵梨子がいつもしていたように、移動の道すがら、ずっと外を眺め続けてきたものの、仙台駅周辺とは違い、ホールに向かう途中の街並みが以前と変わっているのか変わっていないのか、私にはさっぱりわからなかった。

ともあれ、到着して関係者との挨拶と打ち合わせを終えたあと、鞆を携えて踏み入ってみると、座席数が八百席ほどの中規模のホールは、なかなか演奏しやすそうだった。

仙台市の公益財団法人が運営しているそうなのだが、担当者「理想的な残響時間の二・二秒を実現している音楽専用のホールです」と、自負心をちらりと垣間見せて案内してくれた。

まあ、実際にはそれほど単純な話ではないのだが、確かに音の響き方は悪くなさそう。

熊谷達也
調律師
[2013年 文藝春秋]

小池 光の 気になる日本語

16

「結果を出す」

スポーツ選手が試合前にインタビューで、しきりに「結果を出す」という言い方をします。

「結果を出さないといけないので」「しっかり結果を出して」

「結果を出すようがんばります」
みたいに答えるわけである。この言い方は昔は聞かなかったような気がする。最近、特にここ数年の流行のよう思うが、どうか。

これはむしろ、ただの結果でなく、いい結果を出すという意味である。試合に勝つということであり優勝するという意味である。

(いい)結果を出す、(望ましい)結果を出す、(優勝する)結果を出すという意味だ。カッコ内の部分が意識的にか無意識にか省略されているわけである。

それは理解されるが、なんでもぼかして、断言を避けて表現する日本語の癖が出ているようにも思う。野暮な言い方を付け加えれば、勝っても負けても結果は出るであろう。サッカーのワールドカップで日本は一試合も勝てなかったが、これも敗退という結果を出したのである。勝つばかりが結果ではない。

どのスポーツのどの選手でも判で押したように「結果を出す」を連呼す

るのに、いささかの違和感を覚える。ちゃんと「必ず勝ちます」「しっかり勝つてみせます」という答えを誰もしない。表現が画一的で、じぶんの心身をしっかりと通過した、じぶんの言葉でないような気がするが、どんなものか。「結果を出します」と言い続けているかぎり、望むべき結果は得られないような気がする。

それに、この表現の中には結果至上主義のような考えも入っているように、気になるといえば気になる。われわれがスポーツの試合に望むのは、必ずしも望むべき結果ばかりでない。その過程においてはらはらドキドキし、一瞬一瞬を手に汗握って、勝敗の行方に熱中するそのプロセスである。そこにスポーツ観戦、応援の醍醐味がある。つまらない試合だったらいくら勝利してもさしたる感動は得られない。結果にばかりこだわるのでなく、競技の全体性を見据えて欲しく思う。

スポーツに限らず、直面する課題に勝ち負けのようなものが伴う場合はいくらもある。大学受験、就職試験などまさしくそうだが、こういう場合だって大切なことは「結果を出す」だけではないのだから。失敗した経験の中にはいくらでもその人を成長させる契機が含まれている場合がある。結果至上主義はどうも一面的で思慮が浅い。

歌にメロディーをつけたなら」と題したユーモアあふれるお話と、「啄木ソムリエ」の山本玲子さんと、対談「わが友啄木」を行いました。新井さんから矢継ぎ早に出される啄木に関する様々な質問に、よどみなく答える山本さん。お二人のお話からはそれぞれの啄木への思いが感じられ、一人の人間としての石川啄木が立ち上がってくるかのようでした。会場の皆さまは、時に笑い、また大きくうなずきながら熱心に耳を傾けていました。

学芸室日記

○5月29日、文学館のご近所にある旭丘小学校の6年生、総勢55名が、開催中の「石川啄木の世界へつたの原郷をたずねて」を見学に訪れました。岩手へ修学旅行に出かけるので、事前に石川啄木や宮沢賢治について勉強したいとのご希望。これまでもグループ研修で来館する小中学生の姿はありましたが、学年全体での利用は初めてのことでした。この春には、小中学生の皆さんたちが常設展示室を見学する際に配付していたワークシートをリニューアルしました。イラストや地図を用いて、わかりやすく紹介したものです。どちらの取り組みも「はじめの一步」ですが、学校との連携を進め、若い世代にも興味を持ってもらえるような文学館を目指したいと思います。



○5月21日から6月5日まで、仙台市役所1階のギャラリーホールで、「開館15周年仙台文学館ポスター展」を開催しました。開館からこれまでの特別展の中から選りすぐりのポスターをご紹介します。5月30日には、ゲストに仙台の出版社荒蝦夷代表の土方正志氏を迎え、トークイベントを行いました。土方さんは、仙台の文学が活発になってきた要因の一つに初代館長井上ひさしの存在を挙げ、仙台文学館の15年の歩みは仙台の文芸復興の歩みと呼び



○7月13日、ライブ文学館vol.13「啄木と音楽の出会い—新井満さんを迎えて—」を開催しました。第一部では、作家で作詩作曲家の新井満さんの「もしも啄木の短



衝撃の一冊の本

「二冊の本」との御指示を頂いたが、造詣深い碩学や愛書家と異なり、私はいささか躊躇せざるを得なかった。それというのも若年の恥を曝さなくてはならぬ故である。

私は北陸の小さな町に生れ、小二までそこで育ち、以後東京

北部に移転したが、家には子ども向の本や雑誌はおろか、一般の文化的な書など一つもなかった。律儀勤勉な父の、下級官吏の給与の故ではあるが、北陸でも東京でも小学校の同級生で、雑誌を購しているのはごく少数で、それが昭和初期の一般

家庭の状況だった。ようやく中学校に入り、当時としては評判の図書室に入り浸って、明治大正の文豪の作品から、全館の書を読破しようとの野心を抱いて、読書にふけた。しかし「二冊の本」にはこの図書室で出会ったのではなかった。

一年生の教科書は、正規の新品を買ってもらったが、二年生の折悪友から「神田へいくと安く買えるぞ」と教えられ、早速春休み、早朝割引きの往復券で市電に乗り、神田の古本街に出かけた。当時日中戦争の最中だったが、店々には新学期向の書が積み上げられていた。悪友によれば教科書会社が使用予定の教科書を、各校教師に「見本」として献じ、教師が可否を決めた後、用済みの書を古本屋に払い下げ、それが店頭安く並ぶという仕組みで、見本を「みほん」と呼ぶのは一般人で、業者は「ケンボン」と称するとの事。

学校から配布された二年生教科書の一覧表を片手に、もの

の十軒も回らないうちに、予定の教科書を全部整えてしまった。余った時間と代金をどうしようかと考え、その一部で何かよい本でも買おうと思った。せっかくの余金(与金?)なのだから、充分吟味検討すればよいのに、二、三軒のぞいた店先にあつた厚手の、妙なカタカナの題名の本を求め、さっさと帰りの空いている電車に乗りこんでひろげて見た。

序文によって中二の英語力では不明だった「イアリング」という題名は「耳飾り」ではなく動物の一年仔、ここでは野生鹿の子の事で、現在「子鹿物語」として流布されている本だった。その本に強い衝撃を受けつつ、終点まで読みふけり、帰宅後も新学期が始まるまで何度もよみ返した。

この本から受けた衝撃は次の三点であった。
一、それまで摩天楼と自動車、映画と享楽の国と思っていたアメリカで、日本と同様、土地と森林の中で貧困と苦勞を重ね



「イアリング」
M.K. ローリングス著 新居格訳
(昭和15年 洛陽書院)

生活している農民がいて、その清麗で素朴な姿が述べられている事である。墮落醜態を極め上辺の華美を追い求めている日本の一部に対し、誠実に努める人間と、その作に敬服した。
二、一家を支える為、黙々と働く父と、気丈に家事を処置する母を敬愛しながら、成長過程にある少年の、反抗や対立が適確共感をもって描出されている事。特に同じ年頃として「よく解つてなあ」と感嘆する心理や行動と、障がいをもつ子への友情に、何度も鼻をつまらせたのである。

三、そうした一家や少年の心理を心憎いまで描いた作者が女性であり、ピューリッツァ賞を得た文学の魅力、魔力に強く誘惑された事である。添画や映像どころか、カット一つもない、活字だけの展開によって、洋の東西や年齢、風習、時代の差をこえて、人間の心琴をゆさぶる本の、書物の、文の、ことばの力を遅ればせながら知ったのである。



こんなにも強い三点の衝撃をうけたのだから、そのまま素直に進めばよかったのに、やはり中二の未熟の為なのか、新学期早々、学級担任から「諸君は間もなく元服の年を迎える。既に同期生の数人が幼年学校と商船学校に進学し、自分の未来を開拓しつつある事を思い、各自充分考慮して日々努めよ」と喝を入れられたのに対応し、更に学習を深め世の基石となるのを目指したいのと、わが家の経済状態を勘案し、数夜思い迷った末、文学などに迷わぬ為自ら図書室への出入を禁じ、親と社会への最良最善の途として軍

人の学校へ進学し、航空士官をひたすら目標として心身の鍛錬と学習に努めた。

軍国的な世相の故でも、親や教師のすすめではなかったが、真の自立と正しい判断の為に充分先人先達の意見をただす事と、内外の状況や国際情勢を見極める為、政治経済や歴史や文化等が不可欠なのを放擲し、理数科のみに偏った錯誤、稚拙な知見の結果は、近視進行の為受験もならず、慌てて目標を変えたものの、戦災、家族分散、敗戦の後、互に競い合った軍人志望の学友は少尉に任官、特攻死していた事を知



り、昭和二十年以後は、死にはぐれの日々となったのである。

せっかくの書から受け取った衝撃を生かし得ず自らの暗愚のまゝ、今猶、慚愧の至りである。(因みに私が読んだのは新居格訳、洛陽書院版で、戦災で失っ

た後、再び入手して今猶愛蔵しているが、他の「子鹿物語」や映画からは残念にも衝撃を受け得なかった。)

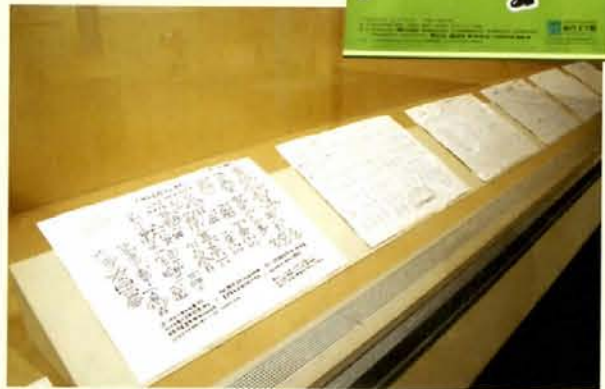


かこさとし(加古里子)
1926年福井県生まれ。児童文学者、工学博士。東京大学工学部卒業後、民間企業の研究所に勤務しながらセールメント活動を行い、子ども会で紙芝居や幻灯作品を作る。47歳で退職して作家活動に専念、未来を生きる子どもたちの知識を育てるため、数多くの作品を発表。作品数は600点以上にのぼる。2008年には菊池寛賞を受賞。2013年にはふるさと福井県に「かこさとしふるさと絵本館(らく)」が開館した。昨年は40年ぶりとなる「からすのパンやさん」や「どろぼうがっこう」の続編を刊行。今年も「だるまちゃんとおうちちゃん」など新刊を発表。現在も旺盛に執筆をつづけている。

こども文学館えほんのひろば 「かこさとしの世界」

2014年7月17日(木)~8月24日(日)

15回目となる夏休みこども文学館。今年のかこさとしさんの世界が展開しました。展示室では、代表作の「からすのパンやさん」、「だるまちゃん」シリーズから、「かわ」、「ならの大仏」、「万里の長城」といった科学絵本の複製原画、そして、かこさんが50年以上にわたって調べ集めた「伝承遊び」の原稿などをご紹介します。



小さい頃にかこさんの絵本に出会ったお父さんお母さんたちが、我が子連れて訪れる姿が多く見られました。「からすのパンやさん」一家と一緒に記念撮影をしたり、かこさんの本で紹介している手作り遊びを体験したり、作品のキャラクターに変身したりと、子どもから大人まで、かこさんの世界を満喫していました。





いわむらかずお 絵本の丘美術館について

1998年4月、栃木県馬頭町(現・那珂川町)の清流那珂川を見下ろす美しい丘の上に開館。この丘は「えほんの丘」と名付けられ、周辺には「えほんの丘農場」「くさばら広場」「くりのみ坂」「うぐいす谷」「りすのちくりん」「とんび谷」などが点在。四季折々、絵本の世界とその舞台である里山の自然が同時に楽しめる場所となっています。美術館は3つの展示室があり、絵本や自然をテーマにした作品が紹介されています。

〒324-0611
栃木県那須郡那珂川町小砂3097
TEL:0287-92-5514 FAX:0287-92-1818
休館日:月曜日(祝祭日にあたる場合は開館、翌火曜日休館)、年末休館(お正月は元旦から開館)、展示替えのための臨時休館あり
開館時間:10時~17時
(入館は16時30分まで)
観覧料:大人900円、中高生700円、小学生500円、幼児300円、団体での入館は予約が必要です(20名様以上10%割引)



14ひきのこもりうた © いわむらかずお



14ひきのひっこし © いわむらかずお



トガリ山のぼうけん
「風の草原」
© いわむらかずお

いわむらさんの著作



「14ひきのひっこし」
(1983年 童心社)



「かんがえるカエルくん」
(1996年 福音館書店)



「ゆうひの丘のなま 今野もんじろう」
(2006年 理論社)



「風といっしょに」
(2002年 理論社) エッセイ集

展示予定資料

- ★ 作品原画: ふうとはなシリーズ、14ひきシリーズ、カエルくんシリーズ、トガリ山シリーズ、こりすシリーズ、ゆうひの丘シリーズ
- ★ いわむらかずお絵本の丘美術館と、その活動を紹介します
- ★ いわむらさんの愛用品・スケッチなど、創作に関わる資料

イベント

★ いわむらかずお おはなし会・サイン会
9月23日(火・祝)

詳細は仙台文学館にお問合せ下さい。
また絵本やグッズの販売も予定しています。お楽しみに。

観覧料: 一般700円、高校生400円、小・中学生200円
(各種割引があります)

出品協力: いわむらかずお絵本の丘美術館
協力: 童心社、理論社
企画制作: 東映株式会社

特別展

いわむらかずお

絵本原画展

世界で二〇〇〇万部のロングセラー
「14ひきのシリーズ」誕生三十年



14ひきのかぼちゃ © いわむらかずお

「おとうさん、おかあさん、おじいさん、おばあさん、そしてきょうだい十ひき。ぼくらはみんなで十四ひきかく」。絵本作家のいわむらかずおさんが、自然の中で暮らす野ねずみの大家族を描いた「14ひきのシリーズ」は、誕生から三十年をむかえ、世界で二〇〇〇万部のロングセラーとなっています。野ねずみ家族の日々の出来事、お引越しやピクニック、芋ほりやお月見、家族団らんの心温まる光景を、自然の姿とともに優しい色遣いで細やかに描写した作品世界は、世代を超え多くの読者を魅了してきました。

栃木県の自然の中で家族とくらしながら創作活動を続けるいわむらさんは、絵本作家としてだけでなく、エッセイストとして、また、自然を愛する観察者として環境保護・教育活動なども行っています。一九九八年からは「いわむらかずお絵本の丘美術館」を開館し、絵本・子ども・自然をテーマに、絵本の世界から広がる様々な活動も行っています。

災害や環境問題を通して、「命」や「生きること」について改めて考えた方も多いのではないのでしょうか。生命への温かな想いと自然への優しいまなざしを感じさせる作品から、安らぎとともに、いわむらさんのメッセージを受け取っていただければと思います。

2014年
9月6日(土)~
11月3日(月・祝)



いわむらかずお (絵本作家)

1939年東京生まれ。東京芸術大学工芸科卒業。1975年東京を離れ、栃木県益子町の雑木林の中に移り住む。主な作品に「14ひきのあさごはん」(絵本にっぽん賞)など「14ひきのシリーズ」、エリック・カールとの合作絵本「どこへいくの? To See My Friend!」(童心社)、「ひとりぼっちのさいしゅうれっしや」(偕成社/サンケイ児童出版文化賞)、「かんがえるカエルくん」(福音館書店/講談社出版文化賞絵本賞)、「トガリ山のぼうけん」シリーズ、「ゆうひの丘のなまかみ」シリーズ(理論社)などがある。「14ひき」のシリーズや「こりす」のシリーズは国内だけでなく、フランス、ドイツ、台湾などでもロングセラーとなり、世界の子どもたちに親しまれている。1998年、「いわむらかずお絵本の丘美術館」を開館。絵本・自然・子どもをテーマに活動を続けている。

「せんだいスクール・オブ・デザイン」 仙台文学館 協力企画 「仙台文学館を再編集する」

せんだいスクール・オブ・デザイン（以下、SSD）とは、東北大学大学院の都市・建築学専攻が地域と連動して取り組む教育プログラム。大学院生と社会人が、仙台市内の各所でプロジェクトやワークショップなどの活動を展開しています。

六月、SSDと仙台文学館、そして建築家ユニット・mi-ri meter（ミリメーター）の三者で、館内のサイン計画について考えるワークショップを行いました。



来館者にも調査にご協力いただきました。

ワークショップでは、初めに来館者と文学館職員を対象として、現状のサインについてヒアリング調査を行いました。気になる点を書きだしていくと、様々な問題点が明らかになり、特に、二階エントランス付近の情報量が多過ぎて、受付の位置や展示室の経路などがつかみづらかったことがわかってきました。調査では、現状のサインの成り立ちや必要性も確認し、その上で、mi-ri meterのお二人から改善案をプレゼンしていただき、アイデアを固めていきました。そして、閉館後に一部のサインを取り外し、新しいサインを設置する作業を行いました。



エントランス前に置かれていたチラシのラックを交流コーナーに移動し、小池光館長の「今月の一首」のパネルが目立つようになりました。



unnecessaryサインを撤去し、スタッフの姿が見えやすくなりました。カウンターにはカッティングシートが貼られ、チケットの購入場所が一目でわかるようになりました。



掲示物を付け替えました。



ゴミ分別の表示も分かりやすく。



みなさんからのご意見をまとめてみると、見えてきたことが...

改善点について検討を重ねました。

mi-ri meterの お二人にインタビュー



〔mi-ri meter プロフィール〕
宮口明子と笠置秀紀による建築家ユニット。1998年、日本大学芸術学部修了。アーバンビクニックシリーズなど都市と関わるプロジェクトを多数発表。ミクロな視点と横断的な戦術で都市を内側からデザインするプロジェクトを実践している。

「仙台文学館の第一印象は？」
宮口 良い建築だなと思いました。特に、河原とか、森林公園から一階に続く感じが良い。だからこそ、館内の貼り紙とかが建築とずれているところが気になって、もったいないなあと思いました。

笠置 館内に入ってから、つい迷いましたね。作り付けのサインがわかりにくいので。事情もあると思いますが、貼り紙の多さが問題だなと思いました。

—ヒアリング調査の結果は？
笠置 お客さんにはすごく評判が良かったです。特に、交流スペースを使っている人は、眺めも良いし、静かで居心地も良いとおっしゃる方が多かったです。そういう意味では、公共建築として、日常の人の居場所を生み出していることはすばらしいことだと思います。普段から使っていると、もうわかりきっているのにサイン

展示物の心づき

わかりやすさ
第一歩は情報の整理から。展示物の優先順位、見られる距離を整理します。

そろえる
統一感を出すために、書体や文字のサイズを揃えます。展示物を並べて貼るときは他の展示物と調を合わせます。

まとめる
追加する展示物の役割を分類して、場所ごとにまとめて掲示します。

増えたら減らす
多は少を兼ねません。情報が多くなると、人は混乱して展示物を認識できなくなります。

保存する
オリジナルの展示物は、データで保存して蓄積してみんなで共有します。作業も楽になるし統一感が出ます。

やれること、たのむこと
すべてのことを自分ではできません。重要なもの、定着したものは、発注して作ってもらいます。

mi-ri meterからのアドバイスが凝縮されています。

のことに気にしない。

宮口 困ったこともなく、特に何も思わないようでした。

笠置 一方、初めて来た方にとっては、案内図や受付の位置がわかりづらい、受付のカウンターに貼り紙が多すぎて必要な情報が目に入っていない、という意見がありました。

—ワークショップを行って、受付のスタッフからも、改善案を提案してもらえようになりました。

笠置 僕らがサインをデザインするには、限られた期間では難しいので、その代わりに意識を変える仕組みをつくらうと思いました。ヒアリングが意識を変えるきっかけになっていたかな。

宮口 とりあえずやってみようということも重要。期間を決めて、試しにサインを変えてみることにしてから、どんどん進

んでいきましたね。

笠置 柔軟に理解していただき、協力していただけたので良かったです。

—最後に、今後に向けてメッセージを。

宮口 職員の皆さんもサインについて、日頃思ったり、感じていたりすることがあると思います。取り組んでいった方が良いんだと気付くことができたなら、すぐやって良かったと思います。

笠置 今回のまとめとして、「サインの心得・レシピ」をつくりました。「マニュアル」ではなく「心得」。専門的ではない、誰でもできる小さなHow toをまとめたという意味です。サインを客観的に見るきっかけになれば良いと思います。日常的に見ていると、当たり前前の風景になっていきますからね。

宮口 半年後ぐらいに、どうなっているか見に来たいと思います。

今回、館内の掲示物が二百近くあることを初めて知りました。お客さまに必要な情報がわかりやすく伝わる空間づくりを努めていきたいと思えます。

「大佛次郎」 大池唯雄 往復書簡展(仮称)

会期 十二月二十二日(土)
〜一月二十五日(日)

昭和十四年、東北初の直木賞作家となった大池唯雄。その大池の作家としての歩みを支えたのが「鞍馬天狗」シリーズで人気を博していた大佛次郎でした。昭和十二年から四十四年まで三十年以上にわたり二人の間で交わされた書簡は、それぞれ大佛次郎記念館、当館で大切に保管され、長い間、日の目を見ないままにありました。後輩作家を励まし、時に厳しく指導する大佛。その教えを真っ直ぐに受け止め向き合う大池。本展ではこれらの書簡を通して、師弟を越えて篤い信頼関係が結ばれてゆく様子を辿ります。

大池唯雄 (大池唯雄提供)

「大佛次郎」 大池唯雄 往復書簡展(仮称)

会場：日立システムズホール仙台(仙台市青年文化センター)シアターホール
入場料：二七〇〇円(全席指定)
※未就学児の入場はご遠慮ください。

プレイガイド：藤崎 仙台三越 仙台文学館 イズミティ21 日立システムズホール仙台一階事務室

震災から三年が経過する今、京極夏彦の言葉と力強い三味線の音色、そして東北の地に根差した舞踏による渾身のステージと、すべての死者へのオマージュとなる、京極夏彦と東雅夫の対談をご堪能下さい。

出演：京極夏彦(小説家)、東雅夫(文芸評論家)、山上進(津軽三味線奏者)、森繁茂(舞踏家)

日時：二〇一四年九月十二日(金)
午後六時半開演

街に出る文学 ライブ文学館Vol.14 「死者の魂と語り合う」 —京極夏彦を 迎えて—

日本には古くから、幽霊や妖怪、異界を描いた「怪談」が存在しました。現実世界では見えないもの、現実とは異なる世界に生きるもの、そうしたものを描く「怪談」はいつの時代も様々な形で人々の心をとらえ続けて来ましたが、「怪談」とは単なるお化けの話ではなく、死者との交感・対話であり、現実では果たすことのできないコミュニケーションにあるのが想像力の結実でもあります。

京極夏彦(撮影 塔下智士)